

浄土宗平和協会 第6回作文コンクール受賞者の報告

受賞校訪問記

令和六年度の平和作文コンクールで、総裁賞、会長賞、学校賞の三賞を受賞された樹徳高等学校を訪ねた。表彰状の授与式に合わせて行く校長先生と総裁賞受賞の生徒さんへの取材が訪問の目的である。受付で来意を告げる。明照学園理事長と樹徳高等学校長を兼務されている野口秀樹先生がお待ちくださっている校長室に案内を受けて入室。続いて受賞者の渡辺紗（すず）さんが、教頭の進藤友宏先生と渡辺さんの学級担任である家住誠先生に伴われて入室。野口先生とは十数年ぶりの再会であったが、笑顔と背筋を伸ばして発せられる明瞭でよく通る声は若い。



校名の由来と教育の心を尋ねた。「徳を樹(う)えるという願いが校名の由来だが、仏教には人は誰でも輝く貴いものを授かって誕生しているという教えがあり、これを本校では徳と表現している。この徳を生徒自らが育み、この輝きを充満させ、自らを信じ、生きることの素晴らしさを実感する青少年を育てていきたい」と口調が熱い。



《各賞及び受賞者》

- 総裁賞 樹徳高等学校 2年生 渡辺 紗
- 副総裁賞 真和高等学校 2年生 平野 陽路
- 副総裁賞 上宮高等学校 3年生 中嶋 駿
- 会長賞 樹徳高等学校 2年生 内田 葵
- 理事長賞 真和高等学校 2年生 小河 百合
- 学校賞(総裁名) 樹徳高等学校

※ 今年度は 320 名の方からの応募がありました。

以下、廣瀬理事長のインタビュー

廣瀬：タイトルの付け方や構成、表現、リズム感のある筆致から、文章の創作に慣れていて、読書量も多く、書くことが好きな生徒さんだという印象を受けましたが、いかがでしょうか？

渡辺：文作の練習などはしていませんが、読書は大好きですね。
廣瀬：文中にある<着物の質感やその空間の匂い>なんて表現は、心から読書が好きでないと使えない表現です。日頃はどのようなジャンルを愛読していますか？

渡辺：特定のジャンルはありません。学校や地域の図書館で借りて読むことが多いですね。

野口：タイトルはどういうイメージで付けましたか？

渡辺：あるテレビ番組の中で、カラー写真を見ていたおばあさんが、「明るい色は平和の色です」って言われたのが、すごく心に残りました。戦争を体験している人だからこそその重みのある言葉というので、印象に残ったので付けました。

廣瀬：昨日まで沖縄に修学旅行でしたが、強く印象に残ったことはありますか？

渡辺：ひめゆりの塔に、亡くなられた一人一人の人物像や亡くなられた経緯と一緒に顔写真が展示されていましたが、何人が亡くなったのかという死者の数に触れるよりも、顔があり、名前があり、日常をどのように過ごしていたのか、さらには故人の個々の性格などを知ることによって彼女たちの死が現実味をともなって湧いてき

たことです。

廣瀬：平和を考える上で大切だと思うことは何でしょうか？

渡辺：抽象的なとらえ方でなく、具体的に戦争で何があったのかについて体験談を聞いたり、自分で記念館などに行って、詳しい情報を自分で知ることだと思います。簡単に忘れてしまわないためにも自分で知ることはとても大切なことだと思っています。

廣瀬：高校卒業後の進路は？あるいは将来の目標を教えてください。

渡辺：JAXA のような機関で宇宙関係の仕事につきたいです。

渡辺さんは中学時代に群馬県で開催された「青年の主張」弁論大会で優勝し、その賞金 10 万円をフードロス関連団体への寄付や、海外の子どもを対象にするチャイルドスポンサー活動に充てている。

渡辺：誕生日やクリスマスにはグリーティングカードを送り、また子どもたちからも定期的に手紙が届きます。自分が誰かにしてあげることというのは、自分の幸福度もも上げることにつながるの、このような<幸福の輪>をもっと広げたいと思っています。

インタビューを終え、野口校長先生にご自慢の【共生図書館】を案内していただいた。読書の楽しみが自然に身につく素晴らしい図書館。樹徳の生徒は幸せである。

廣瀬記

明るい色は平和の色

樹徳高等学校 二年 渡辺 紗

「明るい色は平和の色です。」

八月六日、広島原爆忌の日に放送された番組の中で、被爆者の被爆前の写真をカラー化する取り組みをしている記者の特集がありました。この記者に、九十七才の女性が夫と写ったモノクロの結婚写真のカラー化をお願いしたので、でき上がった写真を食い入るように見ていた女性が発した言葉が冒頭の「明るい色は平和の色です。」なのです。カラー化された写真は、着物の質感で当時のその空間の匂い、夫と交わした言葉など過去の記憶がよみがえり、女性を温かい気持ちにしてくれたことでしょう。

今、私たちの生活の中でカラー(色)は当たり前前で常にも色で囲まれていて、何かを選択する時たくさん色がありすぎて迷うくらいです。そんな当たり前の「色」にこんなにも大きな影響を受けるのは、この女性が戦争を体験したからなのだと思います。想像してみれば戦争は怖くて暗くて悲しくてほぼ一面灰色や黒色のモノクロの世界です。小学生の時に訪れた広島原爆資料館で見てきたおそろしい光景は今でも頭に焼きついて離れません。現在ロシアとウクライナとの戦争が続いていますが、私の兄はロシアの女性と結婚しています。とてもかわいらし

い奥さんです。ウクライナとの戦争が始まる前に婚約し、日本に來日したのは戦争が始まるからです。日本との直通便がなくなってしまう、トルコ経由で丸一日かけて來日しました。最初、家族はロシアの人が日本になじめるのかとても心配していました。しかし、本人は日本語の勉強やおすしやさんでバイトをするなど一生懸命日本に慣れようと努力しています。しかしウクライナとの戦争が始まってしまおうと母は少し複雑だったようです。新聞やマスコミでは、ロシアの凶行が次々と放送され「ロシアは悪」という取り上げ方です。しかし兄嫁のように一人人を見れば、本当は一人の人間としてかわいらしくいい人です。会ったことはないのですが彼女の家族もロシアの田舎に住んでいて、穏やかに暮らしているようです。もし兄嫁がウクライナの人であったとしても同じように感じたと思うのです。

今、兄夫婦はロシアに行っています。彼女は結婚後二年ぶりにようやく両親に会えたのです。この戦争が影響してなかなかロシアに里帰りできなかったのです。ロシアから美しい自然の写真が送られてきました。しかし、ウクライナではその美しい自然がたくさん失われているのです。市民一人ひとりのレベルでは友好を築けるはずなのです。国家間でも早く戦争停止となってモノクロの世界からカラーの世界に戻してほしいと強く願っています。